

研究主題

幼少期における言語獲得へのアプローチ

—母国語を大切に、他言語へも興味を持つ子を育むために—

要約 国際化社会の中、思考の根幹である母国語を大切に、他言語へも興味を持つ子を育みたいと考え、母国語と他言語をリンクさせた授業を試みた。その際、日本語の主語・述語を意識すること、語彙の比較によりそれぞれの言語の特徴を感じさせること、友達と繰り返し協同で活動することに重きを置いた。その結果、日本語の語彙や主語・述語の定着に効果があり、他言語へも興味を持たせることができた。

キーワード： 母国語、他言語、リンク、語彙の比較、主語・述語、友達との協同

I. 主題 副題 設定の理由

急速な国際化・情報化社会の中、我が国においても多言語教育の必要性を感じる時代となった。小学校においても、全体の 92.1%の学校が、何らかの形で英語を取り入れているというデータが上がっている。

(文部科学省 平成 16 年度の実施状況調査より)

一方、母国語である日本語に対しても、力をつけるべきであるとの声が高まっている。第 22 期国語審議会答申にも『外国人とのコミュニケーションのために、外国語を習得することは有効であるが、日本語を母語とする者の言葉の能力の根幹は、日本語能力の習得によって培われることを忘れてはならない。—(中略)—外国語の習得についても母語の能力がその基盤を成している。』とある。

このような時代を生きていく子どもたちには、まず、母国語である日本語を豊かに獲得させたい。その上で他言語の獲得にも意欲を持たせたい。特に音声に敏感で、異質なものにも柔軟な小学校低学年の時期に、母国語も他言語も尊重する資質を持たせるように取り組みたい。それが井出※の言う「これから日本人が持つべき言語観」すなわち「それぞれの言語を、多くの地球の言語の一つとして相対的に捉え、それをもとに自分の言語にプライドを持ち、同時に他の言語に興味を持って理解すること」につながると考える。このような思いから、上記の主題 副題を設定した。

II. 研究の目的

本研究は、幼少期において「母国語を大切に、他言語へも興味を持つ子」を育むための手立てについて明らかにすることを目的とする。

III. 研究の方法

- 1) 文献をもとに、日本語と他言語とをリンクした授業の構想を練る。
- 2) 他言語とのリンクに際し、日本語の特徴を把握し学習材を模索する。
- 3) 授業の視点を絞り込み、授業実践を行う。
- 4) 実践結果をもとに、幼少期における言語獲得についての考察を行う。

IV. 日本語と他言語をリンクした授業構想

日本語の特徴を把握し、日本語と他言語を同じ時間にリンクさせて扱う授業を構想した。リンクさせることで、日本語と他言語とを比較する意識で見ることができ、日本語の特徴に気付きやすくなるとともに、他言語へも興味を持たせることができるのではないかと考えた。他言語とのリンクに際しては、特に次の論に共感を覚えた。

井出祥子『国際化と日本語』文化庁 1996

これからの言語教育で、まず考えなければならないのは、**第一言語である日本語と第二言語である外国語を同じ土俵で扱うこと**であろう。言語を学ぶ子どもは同じ人間であるからである。(略)日本人のアイデンティティーとしての日本語を大事にするには、**他の言語に広げた興味の中で、自分の母語を相対的、客観的に確認することがまず一番に必要なこと**である。

日本語と他言語をリンクさせるにあたり、「日本語の力をつけるための切り込み口」、「幼少期に適した授業のスタイル」、「他言語へも興味を持たせるための工夫」ということを念頭に置き、文献をもとに模索した。

その結果、次の 3 つを授業の視点とした。

視点 1 主語・述語を意識して日本語の文を作ることができるようにすることで、後に他言語を学ぶ際にも基となる力をつける。

視点 2 繰り返し聞いたり、書いたり、話したりする活動を、**友達と協同**で行うことで、言語の獲得を進める。

視点 3 日本語の語彙とそれにあたる他言語の**語彙の由来を知ったり、比べたり**することで、日本語および他言語への興味を高める。

【授業構想に関する主な参考文献】

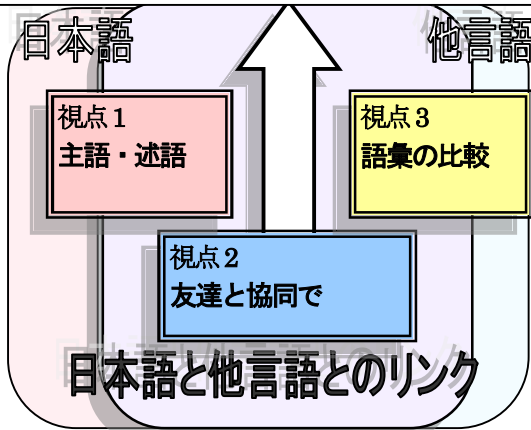
- ※井出祥子 『国際化と日本語』 文化庁 1996
三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』 白水社 2003
金森 強 『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』 教育出版 2003

尚、授業の構想図は、図 1 のようである。

【図 1】

主題 幼少期における
言語獲得へのアプローチ

副題 母国語を大切に、他言語へも興味を持つ子を
育むために



V. 実践結果と考察

1. 授業実践 1 2年国語・英語（総時数 5時間）

- ◆単元名 開こう！言葉の扉 パートI
- ◆目標・日本語と他言語とを比べることにより、言語に関する興味・関心を持つ。
 - ・日本語を英語とともに提示することで、日本語の主語・述語の関係をより理解する。

◆授業の流れ

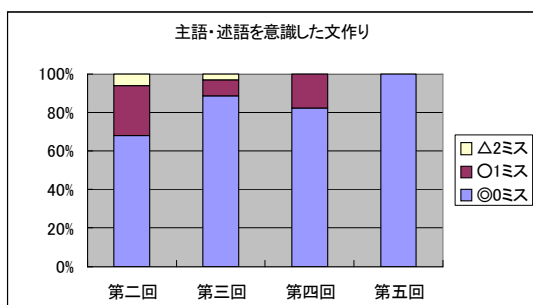
- 1) 言葉の学習への興味と見通しを持つ
- 2) 自分を主語にして文を作る I
- 3) 相手を主語にして文を作る You
- 4) 気持ちを尋ね合う How are you? I'm fine.
- 5) ふりかえりと力だめし

2年国語・光村（下）『なにがどうした』と英語「挨拶」とのリンク

◆考察

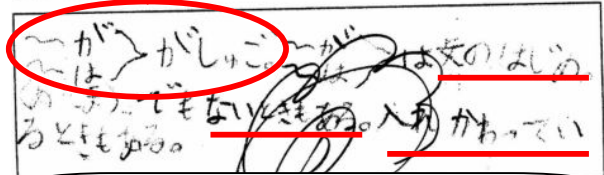
視点1 『主語述語体操』、『述語に気を付けてゲーム』等、体を動かしながら獲得できるように働きかけたこと、毎回カラーのワークシートで文作りをしたことで、グラフ1のような成果が見られた。また、シート1のように、児童の記述からも理解している様子が見られた。

【グラフ1】主語・述語の定着



しゅごってなに?

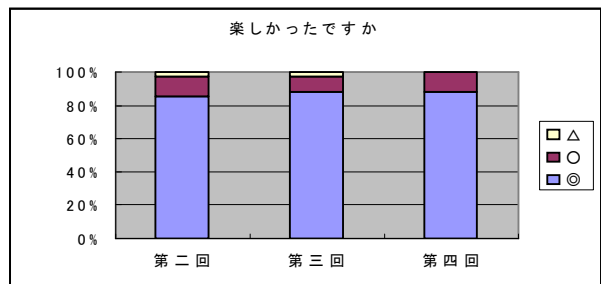
【シート1】



主語は文頭の場合が多いが、主語がない場合や入れかわる場合もあることを理解している。

視点2 毎回、ゲームやクイズでクラス全体のポイントを高めるように働きかけるなど、友達と協同で活動する場を取り入れるようにした結果、グラフ2のようであった。特に、友達と尋ね合う活動を取り入れた第四回では、すべての児童が、とても楽しかった、または楽しかったという反応であった。このことから、友達と協同で活動する場があるとより楽しく言語の獲得に取り組めることが明らかになった。

【グラフ2】授業のふりかえりから



視点3 この単元の導入段階で、

- ・ その外来語が、どの国から来た言葉か
 - ・ 日本にしかない言葉にはどんなものがあるか
- 等についてクイズを行った。第一回のふりかえりでは、日本語、他言語へ強い興味を示した児童は、それぞれほぼ80%に上った。また単元最終のふりかえりにおいても、「もっといろいろな国の言葉を知りたい。」という反応が強く見られた。これは、毎回、英語以外の幾つかの国の言葉で挨拶を繰り返したことにもよると考える。これらのことから、日本語と他言語をリンクさせ、語彙を比較させることで、言語への興味を引き出すことができるということが明らかになった。

2. 授業実践 2 2年国語・英語（15分×5回）

- ◆単元名 開こう！言葉の扉 パートII 家族
- ◆目標・日本語と他言語を比べることにより、言語に関する興味・関心を持つ。
 - ・ 語彙を増やすとともに、主語・述語の関係をより理解する。

2年国語・光村（下）『なかまのことばとかん字』と英語「家族」とのリンク

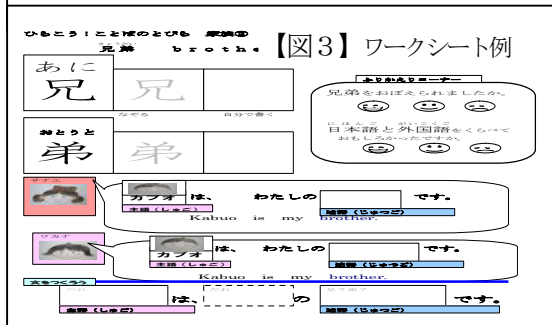
◆授業の流れ

第1回	姉妹 sister
第2回	兄弟 brother
第3回	父母・祖父母 father mother (grandfather grandmother)
第4回	伯父・叔父・伯母・叔母 uncle aunt
第5回	おさらい・力だめし・ふりかえり

◆考察

視点1 主語・述語については、図2のように毎回プレゼン画面で視覚的に提示するとともに、図3のようなワークシートで文作りをすることとした。特に主語の下に赤、述語の下には青と色を決めて提示した結果、定着がよく、力試しでは98%の児童が全問正解した。

【図2】プレゼンソフトによる自作教材の活用

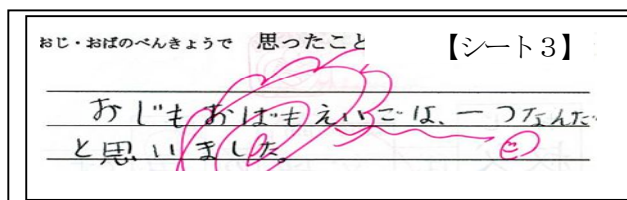
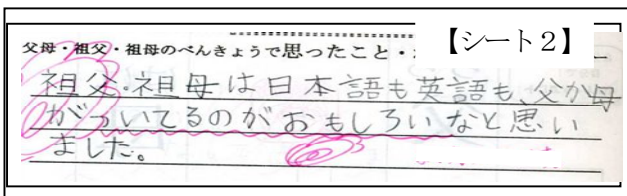


視点2 毎回『ハイハイゲーム』等、友達と触れ合いながら繰り返し聞く活動を取り入れた。その結果、単元のふりかえりで、99%の児童がとても楽しかったと反応した。

また、毎回漢字の筆順をプレゼン画面でなぞり、2語ずつ獲得していくように進めた。書く際には、筆順の歌を唱えながら書くこととした。ふりかえりでは、「姉妹・兄弟・父母の漢字が書けるか」は、95%の児童がよく書ける、5%の児童がまあまあ書けるという意識で、書けないという意識の子はゼロであった。実際、漢字テストの結果も9割の児童が97%以上の正答率であった。また、英語の音声にも毎回親しませた結果、単元最終のふりかえりで「英語の音を聞いて何の言葉が分かりましたか」の問いかけに対して、85%の児童がよく分かったと反応した。このことから、少しずつ繰り返すことで無理なく定着させることが出来る

ということが明らかになった。

視点3 家族の言葉について、毎回日本語と英語、中国語を比べながら進めた。特に第四回の伯父・叔父、伯母・叔母のところでは、中国語ではそれぞれ10以上の言い方があるということを伝えた。その結果、日本語と外国語を比較してとてもおもしろかったという反応が、毎回80%以上であった。シート2、3のように児童の記述からも興味を持ったことがうかがえた。



3. 授業実践3 2年国語・英語 (1時限)

- ◆単元名 開こう！言葉の扉パートⅢ 色の名前
- ◆目標 ・色の名前が、草、木、生き物といった身近な自然に関わって付けられていることに気付くとともに、日本の伝統的な色名についての語彙を増やす。
- ・外国の人も同じような発想で色名を付けていることを知り、言葉への興味を持つ。
- ・「わたしは()色が好きです。」という文を作り、主述を意識する。

2年国語・光村(下)『なかまのことばとかん字』『なにがどうした』と英語「色」I like～とのリンク

◆授業の流れ

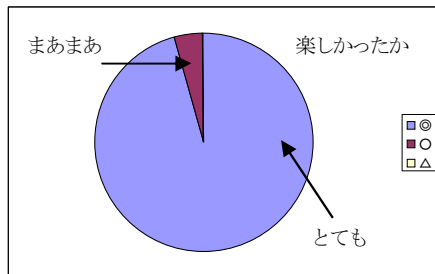
授業においては、プレゼンソフトによる自作教材で音声・画像・筆順の動きを提示する。『色の翁』というキャラクターのガイドで進め、クイズ形式で友達と協同で活動する場を取り入れる。また、3年生英語科(金沢市)の「I like Lions.」の単元を意識し、What color do you like? I like ~.という音声にもふれさせる。

◆考察

視点1 学習の終わりに自分の好きな色やグループの友達の好きな色について文を作ることとした。その際、主語の下に赤線、述語の下に青線を引くことを指示した。その結果、主語・述語の定着もよく、完全正答率90%であった。しかし、前回の単元での完全正答率98%に比べれば、やや低下したと言える。このことから、主語・述語の定着については、一度理解したかに見えても、繰り返し刺激を与え、より確かな力となるよう働きかけることが大切であると分かった。

視点2 4, 5 人グループで相談し、クラス全体のポイントを集めるといったクイズ・ゲーム形式で行った。その結果、どのグループも仲良く協力し、クラス全体のポイントを高める意識で取り組めた。そして学習後、グラフ3のように 95%の児童がとても楽しかったと反応した。

【グラフ3】 実践3のふりかえりより

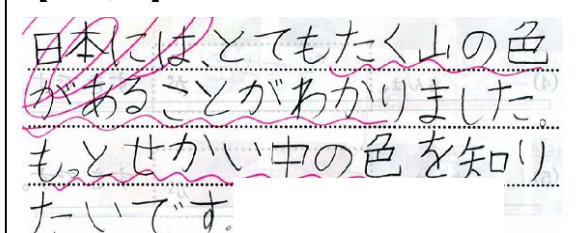


視点3 浅葱色等の古典に現れる色名も取り上げ、英語や場合によっては中国語とも比べることとした。その際、プレゼンソフトによる自作教材により、繰り返し音声と文字、画像を提示した。その例は図4のようである。また、色名を選ぶ際、日本語と全く同じ物(例: 薑色と Violet)、似た発想の物(例: 橙色と Orange)、違う物だがそれぞれの身近な物(例: 鳶色と Coffee brown)等、様々な場合を取り混ぜた。さらに、「茜色とは、赤い根の草から採った汁で染めた色」等の、由来を知らせた。その結果、初めて知った色がたくさんあったという反応が94%あった。また、他言語と比べたことについて、ほとんどの児童がとてもおもしろかったと反応した。また、ふりかえりの記述でも、シート4のように「もっと知りたい」と興味を持っている様子や「外国でも日本語と同じように身近な物から名付けている」ことに気付く姿が見られた。

【図4】 プレゼン画面により文字、英語の音を繰り返し提示



【シート4】



VI. 研究のまとめ

1. 結論

幼少期において「母国語を大切にし、他言語へも興味を持つ子」を育むための手立てとして、「日本語と他言語をリンクさせた学習」を展開した結果、次のようなことが明らかになった。

- ・日本語の語彙とそれにあたる他言語の語彙の由来を知ったり、比べたりすることで、日本語の特徴に気付き、日本語および他言語への興味が高まる。
- ・日本語だけの場面では省略されがちな主語・述語への意識を定着させることができる。
- ・繰り返し聞いたり、書いたり、話したりする活動を友達と協同で行うことで、より楽しく言語を獲得することができる。

尚、幼少期の言語獲得においては、特に次のような手立てが有効である。

- ・カラー絵図入りワークシートの繰り返し活用
- ・プレゼンソフトを活用した自作教材の使用
- ・『主語・述語体操』、『ハイハイゲーム』等のように、友達とともに思考しつつ体を動かすこと
- ・書き順覚え歌のように声を出しながら書くこと
- ・15分間に2語ずつ進める等、毎回少しずつ繰り返すこと

2. 今後の課題

(1) コンピュータの有効活用

幼少期は、音声に対する反応が敏感である。特に他言語の指導においては、良い音に親しませたい。本実践においてはコンピュータを活用し、ALTの協力を得て音声付き教材を作成した。そして繰り返し音声・文字・画像を提示することで効果を上げることができた。今後とも、児童の集中力持続という面からもコンピュータを活用し、言語への興味を引き出す教材、児童が自分で反復練習できる教材を開発していきたい。尚、板書やワークシート等の併用による効果も踏まえて取り組みたい。

(2) カリキュラムの柔軟な運用と学習材の開発

現段階では、国語と他言語を共に「言語」という枠で扱うことは難しい。しかしながら、国語科のねらいを重視しつつ、他言語とリンクさせることは、「他言語へも開かれた言語観」をめざす上でも有効であると考えられる。故に、現行のカリキュラムの中で他言語と関連させて取り組める部分を模索したい。その際、言語への興味を引き出す学習材を吟味し、児童の発達段階に応じて提示することが必要である。例えば、日本語では雨や雪の名前は多様であるが他言語では必ずしもそうではない。このようなことも学習材として活用できるのではないかと考える。母国語を再認識し、大切にする上でも、新たな学習材を模索していきたい。